

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

によじようぜん じ
如浄禅師

令和2年11月第4週放送

如浄禅師は、道元禅師の師匠にあたるお方です。道元禅師がお釈迦様の教えを求めて中国、当時の南^{なんそう}宋に修行に渡ったのは一、二二三年、二十四歳の時でした。それから二年の間、多くのお寺と修行者を訪ねて修行に励みますが、なかなか納得のゆく師匠には巡り合えず、道元禅師は悩まれます。

青年期は自分の将来が懸かった大切な時期です。当時の寺院では優れた住職は短期間で他の寺へ移る為、その人物を求めて修行者もいろいろな修行道場を渡り歩きました。

その様な環境下で、求めている師匠に出会うのは大変難しいことでしたが、^{ようや}漸くにして天童山^{てんどうざんけいとくじ}景德寺で如浄禅師に巡り合います。既にご両親を亡くしていた道元禅師にとって、親の様な親しみを感じたのかも知れません。

如浄禅師の元で道元禅師は自身が求めている仏道修行を実践したのでした。三年にわたり、天童山での修行は続きました。その間、如浄禅師は坐禅には特に厳しい立場を示されました。ひたすらに坐る「^{しかんたざ}只管打坐」。坐禅をすることで身と心が一切のしがらみや、とらわれから離れる「^{しんじんだつらく}身心脱落」の教えは、そのまま道元禅師の仏道修行の柱となり、日本に伝えられることとなりました。

そして道元禅師が帰国する時が来ると、如浄禅師は「都の喧噪に住むことなく、時の権力者

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

に近づかず、ただ山奥の静かな道場で、一人でも良いから本物の修行者を育て、お釈迦様の正しい教えを絶やしてはならない」と示されました。権力に近づいてはならないというのは現代にも通じる教えですが、「一人でも良いから本物の修行者を育てる」という言葉は、道元禅師が開かれた福井県、山奥の修行道場大本山永平寺の特色を示す言葉として、道元禅師に影響を与えたのでした。

如浄禅師は後に 浄じようそ 祖様として尊ばれ、石川県の 永ようこうじ 光寺にある史跡、五老ごろうほう 峰には曹洞宗の祖師、道元禅師・懐えじよう 奘禅師・義ぎかい 介禅師・瑩けいざん 山禅師と共に、如浄禅師ゆかりの品も納められています。お釈迦様から如浄禅師を通じて真っ直ぐに続く教えの道筋に、想いを馳せてみたいものです。

— 終 —